

【資料】 総合地域政策懇話会関係資料

奥田， 八二

<https://doi.org/10.15017/6781047>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 10, pp.326-376, 2023-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学
文書館内)
バージョン：
権利関係：

【資 料】

住民生活の安定と創造的発展のための
総合地域政策懇話会へのおさそい

皆様にはますますご健勝のことと存じます。

さて、あらためて申すまでもなく、高度成長策の行き詰まりが誰れの目にも明らかとなり、国民生活をめぐる危機的状況が、現在、いちだんと深まっています。

私たちの周りでも、郡市の巨大化と大企業優先の開発政策のなかで、各種公害、環境・文化財破壊、水不足などの問題が深刻化し、住民生活環境の基本条件整備の立遅れが目立っています。また、受験戦争が激化し、「落ちこぼれ」、非行など、教育の荒廃は、もはや放置できないところまできています。さらに、減反による農民生活の破壊、中小零細企業の倒産と失業の増大なども大きな問題であります。

これに対して、一方では、経済成長本位の中央集権的、画一的な国の政策を転換させ、基本的価値観を問い直すと同時に、他方では、地域住民の立場から、より豊かな安定した人間生活を創造的に発展させ、地域の歴史と自然条件に根ざした独自色をもった地域社会を形成していくような主体的政策の展開が、こんにち、必要とされているように思われます。

このときに当り、私たち福岡県に在住する研究者、専門家、ならびに生活や文化上の諸問題に強い関心を抱いている有志があつまり、日常的連携を図りながら、総合的地域政策のあり方について、住民の自主性を尊重しつつその生き甲斐の達成をはかり、それに貢献しうる施策をめざして、専門領域や主義主張をこえた検討をすすめ、必要によっては、その構想を各界に提言し、地方自治のより豊かな発展のために寄与していくことが大切ではないかと考えます。事柄は、単に政治、経済のみならず、医療、福祉、教育、芸術、宗教、倫理などの領域にも深くかかわっております。したがって、これらの領域を含めたあらゆる分野の方々に協力していただくことが重要であります。

つきましては、右の趣旨をご理解いただき、本懇話会にご参加下さいますようお願いいたします。

昭和五三年七月二八日

呼びかけ人

- 秋 枝 蕭 子 (福岡女子大学教授・文学部)
内 田 一 郎 (九州大学教授・工学部)
奥 田 八 二 (九州大学教授・教養部長)
木 梨 芳 繁 (弁護士・福岡綜合法律事務所長)

- 木村元亨 (医師)
白井いく (杉森女子高等学校名誉校長)
白石一郎 (作家)
都留大治郎 (九州大学教授・経済学部)
問田直幹 (福岡女学院短期大学長・九州大学名誉教授)
鳥山隆三 (福岡大学教授・理学部長・九州大学名誉教授)
松浦良平 (九州大学教授・理学部長)
水波朗 (九州大学教授・法学部)
安永武一郎 (福岡教育大学教授・第三部主事・九響常任指揮者)
山田龍雄 (九州大学名誉教授)
山村謙一 (福岡公団住宅自治協議会長)
横松宗 (八幡大学教授・元八幡大学長)

総合地域政策懇話会会則

第一条 (名称)

本会は、総合地域政策懇話会(略称、地域懇)と称する。

第二条 (事務所の所在地)

本会の事務所は、福岡市におく。

第三条 (目的)

本会は、住民生活の安定と創造的発展のための総合的地域政策の在り方について懇話会を催し、それを母体にして、専門分野をこえた会員の連携・協力のもとに調査・研究活動を行い、必要に応じて地域政策について提言することを目的とする。

第四条 (事業)

本会は前条の目的を達するため、次の事業を行う。

- 1、懇話会の開催
- 2、調査研究の実施
- 3、地域政策の提言
- 4、講演会の開催
- 5、その他必要な事項

第五条 (会員)

本会は、第三条の目的に賛同する福岡県内(場合により県外)居住の研究者、専門家およびさまざまな生活や文化上の諸問題に強い関心をもつ者を会員とする。

会員は、本会の目的に賛同し本会の事業に参加する普通会員と、本会の目的に賛同する賛助会員とする。

第六条 (役員)

本会に、次の役員をおく。

代表幹事 若干名

常任幹事 若干名

幹事 若干名

監事 二名

第七条（役員任期）

役員任期は一年とする。ただし、再任を妨げない。

第八条（顧問）

本会に若干の顧問をおくことができる。

第九条（会費）

普通会员の会費は、月額一口五〇〇円とし、本会の収入は、会費、寄附金によるものとする。

第十条（会計）

会計年度は、一月一日から十二月三十一日までとする。

第十一条（施行）

この会則は、昭和五十三年八月七日から施行する。

役員名簿

◎顧問

- 内田 一郎 （九州大学工学部）
- 白井 いく （杉森女子高等学校名誉校長）
- 鳥山 隆三 （福岡大学理学部）
- 安永武一郎 （福岡教育大学 九響常任指揮者）
- 山田 龍雄 （九州大学名誉教授）
- 植松 宗 （八幡大学法経学部）

◎代表幹事

- 秋枝 蕭子 （福岡女子大学文学部）
- 奥田 八二 （九州大学教養部）
- 白石 一郎 （作家）
- 都留大治郎 （九州大学経済学部）
- 問田 直幹 （福岡女学院短期大学）
- 松浦 良平 （九州大学理学部）
- 水波 朗 （九州大学法学部）
- 山村 謙一 （福岡公団住宅自治協議会長）

◎常任幹事

- 石村善治 (福岡大学法学部)
岩城正彦 (福岡教育大学)
上野重義 (九州大学農学部)
応地義雄 (福岡教育大学)
門田見昌明 (西南学院大学文学部)
木梨芳繁 (弁護士)
衣笠哲生 (九州大学教養部)
木村元亨 (医師)
後藤賢一 (九州大学教養部)
権藤与志夫 (九州大学教育学部)
猿渡公一 (演出家)
長 憲次 (九州大学農学部)
中尾義孝 (画家)
西島有厚 (福岡大学人文学部)
林 健一郎 (弁護士)
深町郁弥 (九州大学経済学部)
船越英雄 (福岡教育大学)
松本洋一 (弁護士)
馬奈木昭雄 (弁護士)
三上礼次 (九州芸術工科大学)
森 祐行 (九州大学工学部)
山村延昭 (西南学院大学経済学部)
吉野高幸 (弁護士)

◎監事

- 土井仙吉 (福岡教育大学)
片山伍一 (九州大学経済学部)

(昭和五十三年八月現在)

※『地域懇のしおり』1978年8月7日発行より転載。

【資料】

総合地域政策懇話会 歴代役員一覧

役職	氏名	選出年月日 所属・職業	1978.8.7	1979.8.7	1980.8.7	1981.8.7	1982.8	1983.8.6	1984.8.7	1985.8.5	1986.8.2	
顧問	池田 数好	九州大学名誉教授										
	内田 一郎	九州大学工学部										
	奥田 八二	九州大学教養部	(この間は代表幹事)							(福岡県知事)		
	白井 いく	杉森女子高等学校名誉校長										
	具島兼三郎	九州大学名誉教授										
	高木 暢哉	福岡女子大学										
	鳥山 隆三	福岡大学理学部										
	原 俊之	中村学園大学										
	樋口謙太郎	福岡大学医学部										
	前川 一之	福岡県社会福祉短期大学										
	安永武一郎	福岡教育大学 九響常任指揮者									(福岡教育大学)	
	山田 龍雄	九州大学名誉教授										
	横松 宗	八幡大学法経学部										
代表幹事	岩元 和秋	西南学院大学経済学部										
	秋枝 簾子	福岡女子大学文学部										
	岩井 龍也	香蘭女子短期大学										
	奥田 八二	九州大学教養部										
	木梨 芳繁	弁護士	(この間は常任幹事)									
	白石 一郎	作家										
	都留大治郎	九州大学経済学部										
	問田 直幹	福岡女学院短期大学										
	林 迪廣	九州大学法学部										
	松浦 良平	九州大学理学部										
	水波 朗	九州大学法学部										
	山村 謙一	福岡公団住宅自治協議会長										
	常任幹事	石川 捷治	九州大学法学部									
石村 善治		福岡大学法学部										
岩城 正彦		福岡教育大学										
上田 恵子		生活コンサルタント									(消費コンサルタント)	
上野 重義		九州大学農学部										
宇都宮英人		弁護士										
応地 善雄		福岡教育大学										
梶原 壤二		九州大学理学部										
椛島 忠雄		久留米市労連										
門田見昌明		西南学院大学文学部										
亀井 明德		九州歴史資料館										
木梨 芳繁	弁護士	(この間は代表幹事)										

【資料】

地域懇ニュース（発行：総合地域政策懇話会）No1～No94 総目次

号数	発行日	目次	著者	頁
No1	1978.9.20	発会に際して	奥田八二（九州大学教授・教養部）	1
		発会までの足どり	木梨芳繁（弁護士・福岡総合法律事務所長）	3
		《記念講演》自然・社会・人間—その現代的、地域的考察—	岩片磯雄（九州大学名誉教授）	5
		講師紹介	松本勗（九州大学教授・農学部）	11
		《発会式印象記》地域懇への期待	権藤与志夫（九州大学助教授・教育学部）	12
		地域懇のうごき		13
		茶のみばなし		13
No2	1978.10.20	「地域の復権を求めて」	岩元和秋（九州大学教授・経済学部）	1
		講師紹介	八田薫（西南学院大学名誉教授・第一経済大学教授）	8
		「博多祇園山笠」一町人自治の根本—	帯谷栄之助（博多町人文化連盟事務局長）	9
		講師紹介	木梨芳繁（弁護士）	12
		ひとこともの申す	丹生義孝（弁護士）	12
		よびかけ人としてひとこと	秋枝蕭子（福岡女子大学教授・文学部）	14
		地域懇のうごき		15
		立ち話し		15
No3	1978.11.20	「筑後大堰建設に対するノリ漁民の反対」	木脇洋（毎日新聞記者）	1
		「北部九州の水資源開発計画の問題点」	蔦川正義（佐賀大学助教授・経済学部）	4
		「筑後大堰建設禁止の裁判について」	馬奈木昭雄（弁護士）	8
		質疑応答のまとめ	堤泰也（久留米第一法律事務所事務局長）	12
		地域懇の発展をめざして	木村元亨（医師）	14
		地域懇のうごき		15

		井戸端会議		15
№4	1978.12.20	「都心の概念」	鈴木広（九州大学助教授・文学部社会学）	1
		「都心の概念」をめぐる討論から	井沢英二（九州大学講師・工学部）	5
		鈴木さんの論を聞いて	西嶋有厚（福岡大学教授・人文学部）	7
		対話とは？	水波朗（九州大学教授・法学部）	9
		愛＝参加	猿渡公一（福岡現代劇場）	10
		地域懇のうごき		11
		地域懇ニュース・後記		11
№5	1979.1.20	地域の復権を求めて—地域ジャーナリズムの課題—	宮田弘司（西日本新聞社論説委員長）	1
		質疑応答のまとめ	大野誠（西日本新聞記者）	8
		よびかけ人のひとりとして	問田直幹（福岡女学院短期大学長・九州大学名誉教授）	10
		地域懇のうごき		11
		炉辺説話		11
№6	1979.2.20	高校入試を考える	吉見和子（高校入試を考える F 連絡協議会代表）	1
		質疑のあらすじ	権藤与志夫（九州大学助教授・教育学部）	11
		社会投資のほんとうの意義	横松宗（八幡大学教授・法経学部）	13
		事務局のねがい	奥田八二（代表幹事・事務局担当）	15
		地域懇の動き		15
		春宵寸話		12
№7	1979.3.20	地域文化について—福岡の場合—	北川晃二（作家・フクチニ新聞社社長）	1
		質疑応答のまとめ	福間次郎（フクニチ新聞記者）	5
		よびかけ人としてひとこと	白石一郎（作家）	7
		地域懇の動き		8
		花見酒		8

No8	1979.4.20	地域の復権を求めて—流通機構と消費者問題—	阿部真也（福岡大学教授・商学部）	1
		阿部教授の話を聞いて	奥田八二（九州大学教授・教養部）	5
		農山村の地域問題	内田一郎（九州大学教授・工学部）	8
		地域懇の動き		9
		つつじ園		9
No9	1979.5.20	地域の復権を求めて—九州自治州の構想—	手島孝（九州大学教授・法学部）	1
		質疑応答のまとめ	宇都宮英人（弁護士）	9
		都市の発展に思う	日永田敏美（華道家）	11
		よびかけ人としてひとこと	白井いく（杉森女子高等学校名誉校長）	13
		梅雨前線		14
		地域懇の動き		15
No10	1979.6.20	地域の復権を求めて—都市再開発について—	近藤昭三（九州大学教授・法学部）	1
		区画整理・再開発と住民運動	三浦謙（弁護士）	7
		地域懇と地域活動	山村謙一（福岡公団住宅自治協議会長）	9
		地域懇の動き		11
		紫陽花		11
別冊 No1	1979.8.7	地域に根ざした博物館を考える		
		はじめに	奥田八二（九州大学教授・教養部）	1
		西欧との比較において、わが国の文化施策の遅れを痛感する	船越英雄（福岡教育大学教授）	2
		博物館建設に関する私の意見	徳本正彦（九州大学教授・教養部）	3
		博物館を考える	門田見昌明（西南学院大学教授・文学部）	4
		市町村文書の保存も	井上忠（福岡大学教授・人文学部）	5
		博物館の役割	森祐行（九州大学助教授・工学部）	5
		福岡に自然史博物館を作ろう	白水隆（九州大学教授・教養部）	6
		福岡に博物館を	奥田八二（九州大学教授・教養部）	7

		博物館に関する意見	山口宗之 (九州大学教授・教養部)	9
		博物館について考える	中尾義孝 (画家・博多第一中学校教諭)	9
		博物館のフィロソフィ	権藤与志夫 (九州大学助教授・教育学部)	10
		博物館と史料館	藤本隆士 (福岡大学教授・商学部)	11
		博物館に思うこと	野口喜久雄 (九州大学教授・教養部)	12
		博物館と私	木梨芳繁 (弁護士)	13
		これからの博物館	亀井明德 (九州歴史資料館)	14
		資料 (1) 福岡県内美術館・歴史資料館等一覧表		15~16
		資料 (2) 福岡県内美術館・歴史資料館等一覧表		
		資料 (3) 日本における博物館・美術館の分類別館数一覧表		
№11	1979.8.20	地域の復権を求めて—福岡県の埋蔵文化財の保存について—	亀井明德 (九州歴史資料館)	1
		討論の部	西嶋有厚 (福岡大学教授・人文学部)	5
		総会報告		8
		地域懇のうごき		13
№12	1979.9.20	地域の復権を求めて—地域に根ざした博物館を考える—	奥田八二 (九州大学教授・教養部)	1
		歴史博物館について思う	西嶋有厚 (福岡大学教授・人文学部)	5
		討論・意見 (要約)	門田見昌明 (西南学院大学教授・文学部)	9
		地域懇ニュース総目次 (№1~№12)		12
		地域懇のうごき		15
№13	1979.10.20	高校から大学へのよき進学のために—実態調査からの報告—	中島直忠 (九州大学教授・教育学部)	1
		質疑・討論まとめ	門田見昌明 (西南学院大学教授・文学部)	29
			今中栄三郎 (筑紫丘高校教諭)	
		地域懇のうごき		31

No14	1979.11.20	—「町世話人制度のあり方」—	山村謙一（福岡公団住宅自治協議会長）	1
		討論・意見	土井仙吉（福岡教育大学教授）	10
		地域懇のうごき		13
		落ち葉焚き		13
No15	1979.12.20	環境アセスメント制度と住民自治	安東毅（九州大学教授・教養部）	1
		質疑応答・討論まとめ	衣笠哲生（九州大学教授・教養部）	7
		地域懇のうごき		11
		緊揮一番		11
No16	1980.1.20	地域と婦人の生活	古味堯通（福岡教育大学教授）	1
		討論のあらまし	井澤英二（九州大学講師・工学部）	11
			門田見昌明（西南学院大学教授・文学部）	
		寒稽古		14
		地域懇のうごき		15
No17	1980.2.20	地域における公民館の役割	田岡鎮男（平尾公民館主事）	1
		福岡市地域公民館の発展的な再生をねがって	御塚隆満（福岡市教育委員会職員）	9
		中国旅行のこと	安永武一郎（福岡教育大学教授・九響常任指揮者）	14
		春一番		18
		地域懇のうごき		19
No18	1980.3.20	「百万都市の周辺」—小郡市の変遷から—	木村晃郎（版画家）	1
		主要な討論	徳本正彦（九州大学教授・教養部）	3
		博物館建設推進運動のために	奥田八二（九州大学教授・教養部）	6
		地域懇のうごき		15
		春風駘蕩		15
No19	1980.4.20	日本の医療—果たしてパンドラの箱か？—	古賀督（古賀クリニック院長）	1
		質疑応答のまとめ	森下公平（森下産婦人科院長）	8

			木梨伸子 (フリーライター)	
		何を問題とするか 一大学人としての地域懇への期待	後藤賢一 (九州大学教授・教養部)	10
		馬耳東風		12
		地域懇のうごき		13
№20	1980.5.20	地域に根ざした博物館—自然史博物館の場合—	鳥山隆三 (福岡大学教授・理学部・九州大学教授名誉教授・北九州市自然史博物館開設準備室室長)	1
		博物館問題質疑応答	西嶋有厚 (福岡大学教授・人文学部)	8
		当面の博物館設立運動の経過について	奥田八二 (九州大学教授・教養部)	11
		地域懇のうごき		15
		泰山鳴動		15
№21	1980.6.20	福岡と音楽	木村茂 (福岡文化連盟事務局長・元西日本新聞社文化部長)	1
		討論から	牛島和夫 (九州大学教授・工学部)	3
		集中豪雨		7
		地域懇のうごき		8
№22	1980.7.20	農業にとっての都市化 (都市開発) —おきざりにされつづける大切なもの— <都市農業論のためのノート>	宇根豊 (福岡農業改良普及所農業改良普及員)	1
		討論のとりまとめ	上野重義 (九州大学教授・農学部)	17
		地域懇のうごき		20
		入道雲		20
№23	1980.8.20	エネルギー危機を考える—ソフト・エネルギー・バス—	森茂康 (九州大学教授・教養部)	1
		質疑応答	後藤賢一 (九州大学教授・教養部)	10
		第三回総会報告		12
		地域懇のうごき		18
		如意棒		19
№24	1980.9.20	期待される歴史博物館	西嶋有厚 (福岡大学教授・人文学部)	1

		博物館の構想—歴史博物館の場合—	亀井明德（九州歴史資料館員）	6
		討論・意見（要約）	岡崎良敬（福岡大学教授）	9
		地域懇ニュース総目次（No13～No24）		10
		地域懇のうごき		13
		秋刀魚		13
No25	1980.10.20	地域における美術館の役割	古川智次（福岡大学助教授・人文学部）	1
		意見の要約	笠井進（フクニチ新聞記者）	9
		地域懇のうごき		11
		忙中有閑		11
No26	1980.11.20	子どもの生活環境	高良竹美（中村学園大学付属壱岐幼稚園長・福岡県民話研究会会長）	1
		討論・意見（要約）	古味堯通（佐賀大学教授）	9
		地域懇のうごき		12
		空念仏		12
No27	1980.12.20	文化遺産としての建築物	土田充義（九州大学助教授・工学部）	1
		近代建築の保存について（討論）	根来昭仁（県教育庁文化課）	17
		地域懇のうごき		19
		門外漢		19
No28	1981.1.20	コミュニティ心理—とくに地域社会と心の健康について—	安藤延男（九州大学教授・教養部）	1
		質疑・意見のまとめ	権藤与志夫（九州大学教授・教育学部） 木梨伸子（フリーライター）	6
		博物館建設推進運動の現段階	奥田八二（九州大学教授・教養部・博物館建設推進会議副会長）	9
		地域懇のうごき		13
		順風満帆		14
No29	1981.2.20	科学技術博物館について	藤井哲（九州大学教授・生産科学研究所）	1

		質疑・意見のまとめ	船越英雄 (福岡教育大学教授)	5
		地域懇のうごき		8
		雛まつり		9
№30	1981.3.20	校内暴力とその対策	安河内義巳 (福岡教育センター指導主事)	1
		質疑応答・討論のまとめ	佐久間章 (九州大学教授・教養部)	9
		地域懇のうごき		13
		唯我独尊		13
№31	1981.4.20	人間、一この矛盾したもの一	池田数好 (九州大学名誉教授)	1
		質疑・応答 (要約)	江口鉄男 (九州大学教授・総合理工学研究科)	5
			木梨伸子 (フリーライター)	
		地域懇のうごき		12
樟若葉		12		
№32	1981.5.20	情報公開性について一とくに市町村における一	嶋田英男 (福岡女学院短期大学教授)	1
		質疑応答のまとめ	石村善治 (福岡大学教授)	17
		地域懇のうごき		26
		硝子張り		27
№33	1981.6.20	博多の鳥類	土谷光憲 (日本野鳥の会福岡支部事務局長)	1
		一人の研究者として	三上礼次 (九州芸術工科大学助教授)	4
		地域懇のうごき		18
		梅焼酎		19
№34	1981.7.20	地下鉄を市民の足にする三つの問題提起	吉田信夫 (福岡大学教授)	1
		意見の要約	内田一郎 (九州大学教授・工学部)	7
		日米同盟を考える	具島兼三郎 (九州大学名誉教授・前長崎大学長)	14
		地域懇のうごき		21
		微風吹道		21
№35	1981.8.20	筑豊の交通を考える一ローカル	野田秋雄 (久留米大学)	1

		線廃止を契機として	講師)	
		討論の要旨	坂口孝一 (九経調研究員)	8
		科学と宗教	問田直幹 (福岡女学院短期大学長・九州大学名誉教授)	12
		第四回総会報告		18
		地域懇のうごき		23
		唐辛子		23
No36	1981.9.20	行政改革と地方の立場—斎藤恒孝氏の話提供要約—	藤本英夫 (福岡県地方課)	1
		地域懇ニュース総目次 (No25～No36)		10
		地域懇のうごき		12
		百舌鳥		12
No37	1981.10.20	地域と健康科学センター	緒方道彦 (九州大学教授)	1
		意見交換	奥田八二 (九州大学教授・教養部) 注: 意見交換の復元記録であり、本人の見解などの記述は無し	5
		五臓六腑		7
		地域懇のうごき		8
No38	1981.11.20	福岡市壮年男性の生活と学習—暮らしの中で求めているもの—	諸岡和房 (九州大学教授・教育学部)	1
		意見交換の要約	司会: 上田恵子 (生活コンサルタント)	9
			テープ起こし: 中尾義孝 (地域懇ニュース編集担当・画家)	
		曲学阿世		11
地域懇のうごき		12		
No39	1981.12.20	九州と文学	昆 豊 (福岡教育大学教授)	1
		—質疑応答のまとめ—	湯川達典 (日本近代文学学会会員)	10
		地域懇のうごき		14
		捧腹絶倒		14

№40	1982.1.20	福岡地方の自由民権運動について	堤啓次郎（西南学院大学助教授）	1
		質疑応答のまとめ	西嶋有厚（福岡大学教授・人文学部）	7
		地域懇のうごき		10
		凱風快晴		11
№41	1982.2.20	福岡県における教育問題	衣笠哲生（九州大学教授・教養部）	1
		意見の要約	門田見昌明（西南学院大学教授・文学部）	11
		地域懇のうごき		14
		雛人形		14
№42	1982.3.20	新県庁の光と影	笠井進（フクニチ新聞記者）	1
		意見交換の概要	諸岡和房（九州大学教授・教育学部）	4
		資料Ⅰ 県庁舎平面図		6
		資料Ⅱ—①議会棟横断概略図		7
		資料Ⅱ—②行政棟・警察棟横断概略図		
		胡蝶花		8
		地域懇のうごき		9
№43	1982.4.20	美術館 鑑賞者の立場から	深野治（フクニチ新聞文化部長）	1
		質疑・意見交換の要約	中尾義孝（画家）	7
		地域懇のうごき		11
		仁輪加		12
№44	1982.5.20	テレビ CM と消費者心理—成功した地域密着型 CM—	山本文夫（RKB 毎日放送マーケティング部副部長）	1
		企画担当の立場から	佐久間章（九州大学教授・教養部）	6
		地域懇のうごき		14
		照魔境		14
№45	1982.6.20	地域文化と国際性—有田焼に見る陶芸の東西交流—	深川正（香蘭社社長）	1
		文化の創造的発展 大衆文化時代と国際性	相羽堯（福岡文化連盟事務局長・西日本新聞論説委員）	8
		線香花火		9

		地域懇のうごき		10
No46	1982.7.20	大学に何を期待するのか	津谷明石（朝日新聞西部本社運動部長）	1
		質疑・意見交換の要約	安藤延男（九州大学教授・教養部）	5
		深山幽谷		9
		地域懇のうごき		10
No47	1982.8.20	これからの小売業のあり方	淵上禮蔵（ゆう苑社長）	1
		若干のコメント	鈴木武（福岡大学教授）	7
		第五回総会報告		9
		地域懇のうごき		14
		自縄自縛		14
No48	1982.9.20	博多の祭り	江頭光（西日本新聞社文化部長）	1
		筑前琵琶の発生と現況	帯谷栄之助（博多町人文化連盟事務局長）	6
		地域懇のうごき		9
		飽食暖衣		9
No49	1982.10.20	行政改革をめぐる諸問題	徳本正彦（九州大学教授・教養部）	1
		「行政改革」の背景をめぐって—政治学的視点からの二、三の問題提起—		
		行政改革と地方自治	岩元和秋（西南学院大学教授）	6
		司会者としての感想 討論のまとめにかえて	石村善治（福岡大学教授）	11
		地域懇ニュース 総目次（No37～No48）		13
		地域懇のうごき		15
		月下独酌		15
No50	1982.11.20	不況下の住民生活	中西次男（西日本機械センター(株)代表取締役）	1
		錯誤の創出者としての中小企業	原野利彦（長崎大学助教授）	7
		地域懇のうごき		9
		明眸皓齒		9
No51	1982.12.20	『福岡県とはどんなところか』 県百科事典の編集を終えて	大場重保（西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部顧問）	1
		福岡県人物メモ		7

		出版・書店界の近況		10
		地域懇のうごき		11
		猪突猛進		12
№52	1983.1.20	開戦三十二周年の前夜に一福岡の政治的風土を考える一	西嶋有厚 (福岡大学教授・人文学部)	1
		司会者覚書	志垣嘉夫 (九州大学助教授・西洋史学)	8
		資料：昭和57年5月30日福岡県大東亜戦争戦没慰霊顕彰会建立碑文		11
		荒唐無稽		12
		地域懇のうごき		13
№53	1983.2.20	新しい市民運動	伊藤寛道 (福岡アメリカン・センター副館長)	1
		地域懇のうごき		7
		生々流転		8
		<資料>アメリカン・センター案内		
№54	1983.3.20	マスコミ「ヤング欄」編集こぼれ話	佐々木喜美代 (シティ情報ふくおか編集長)	1
		質疑・意見の中から	中尾義孝 (画家)	6
		地域懇のうごき		9
		磯菜摘み		9
№55	1983.4.20	離婚にみる世相	阿部好子 (福岡家庭裁判所調停委員)	1
		質疑・意見交換のまとめ	木梨吉茂 (弁護士・福岡綜合法律事務所長)	9
		地域懇のうごき		14
		明鏡止水		14
№56	1983.5.20	地域を考える哲学	原野利彦 (長崎大学助教授)	1
		討議のまとめ	水波朗 (九州大学教授・法学部)	11
		地域懇のうごき		14
		隔靴搔痒		14
№57	1983.6.20	福岡県知事選の回顧と展望	瓜生洋一 (九州工業大学助教授)	1
		討議のまとめコメント	石川捷治 (九州大学助教授)	8
		地域懇のうごき		13
		人面獣心		14

№58	1983.7.20	「国際化とは」	伊藤寛道（福岡アメリカンセンター副館長）	1
		例会のまとめ	中尾義孝（画家）	2
		地域懇のうごき		9
		夏芝居		10
№59	1983.8.20	いま話題の情報公開を考える	川上宏二郎（西南学院大学教授・法学部）	1
		質疑応答		7
		質疑のまとめ	嶋田英男（福岡女学院短期大学教授）	19
		第六回総会報告		20
		地域懇のうごき		24
		多岐亡羊		25
№60	1983.9.20	福岡の演劇を語る一司会者として―	森下公平（医師・福岡市民劇場顧問）	1
		福岡の演劇の動向	高尾豊（生活舞台演出）	2
		福岡現代劇場はなにを求め続けてきたのか	猿渡公一（劇団福岡現代劇場演出）	5
		テアトル・ハカタの場合	野尻敏彦（テアトル博多演出）	10
		地域懇のうごき		13
		秋の暮		14
№61	1983.10.20	「非行」問題と地域社会	松尾祐作（福岡教育大学助教授）	1
		意見と討論のまとめ	門田見昌明（西南学院大学教授・文学部）	7
		子供に目を向けよう	奥田八二（福岡県知事）	11
		県の青少年対策行政について	井上昭和（福岡県民生部長）	12
		地域懇ニュース 総目次（№49～№60）		13
		鉄仮面		15
		地域懇のうごき		16
№62	1983.11.20	取材を通して見た奥田県政・六ヵ月の評価と課題	清水正信（西日本新聞都市圏部長）	1
		奥田県政と横道道政 同時誕生の革新地方自治を見る	清水正信（西日本新聞都市圏部長）	6
		「奥田丸半年目」についてのとりとめもない印象記	今里頼子（キャンパス福岡編集長）	10
		地域懇のうごき		12

		是是非非		13
№63	1983.12.20	スポーツと未来社会 なぜド ウ・スポーツか	梶山彦三郎 (福岡大学 体育部長)	1
		<独断と偏見に満ちた講師紹介 >	津谷明石 (前朝日新聞 西部本社運動部長・現 同社論説委員)	7
		剛毅木訥		9
		地域懇のうごき		10
№64	1984.1.20	激動の1983年をふりかえって	斎藤文男 (九州大学教 授)	1
		地域懇のうごき		9
		太極拳		9
№65	1984.2.20	福岡は音楽の都になり得るか— 音楽を支える地域的土壌を考え る—	青木秀 (西日本新聞副 社長)	1
		質疑・意見のまとめ	安永武一郎 (福岡教育 大学教授・九響常任指 揮者)	4
		地域懇のうごき		10
		桃花歴乱		11
№66	1984.3.20	「老人問題を考える」 老人の 生と性	田中多聞 (老人医学研 究所所長)	1
		質疑のまとめ	諸岡和房 (九州大学教 授・教育学部)	7
		高令化社会へむけての私の提言	花田守 (前福岡県労働 金庫理事長)	9
		地域懇のうごき		15
		軽佻浮薄		16
№67	1984.4.20	地域における私学の役割	横松宗 (元八幡大学長)	1
		討議のあらまし	安藤延男 (九州大学教 授・教養部)	9
		地域懇のうごき		11
		八十八夜		12
№68	1984.5.20	地方の出版活動 地域性と普遍 性	田村明美 (梓書院社長)	1
		質疑・意見のまとめ	中尾義孝 (画家)	5
		地域懇のうごき		15
		博多時間		15
№69	1984.6.20	フランス滞在記抄	志垣嘉夫 (九州大学助 教授・西洋史学)	1

		一面錦上ノ花他面蛇足	福留久大（九州大学助教授・教養部）	7
		地域懇のうごき		11
		小心翼翼		11
No70	1984.7.20	望ましい公務員の姿勢を探る—遅れず、休まず、働かずの時代ではない—	池田敏（西日本新聞論説委員）	1
		例会のまとめ	花田守（前福岡県労働金庫理事長）	5
		地域懇のうごき		10
		栄枯盛衰		10
No71	1984.8.20	零歳からの教育—筑豊からのレポート	横山正幸（福岡教育大学助教授）	1
		討論のまとめ	佐久間章（九州大学教授・教養部）	8
		第七回総会報告		10
		地域懇のうごき		14
		自画自賛		15
No72	1984.9.20	国際都市福岡の可能性を探る（Ⅰ）	エレーヌ・ド・グロート（福岡大学助教授）	1
		（Ⅱ）	ミヒェル・ヴォルフガンク（九州大学助教授）	4
		（Ⅲ）	花田伸久（九州大学教授・倫理学）	7
		司会者雑感	志垣嘉夫（九州大学助教授・西洋史学）	13
		地域懇のうごき		15
		養生訓		15
No73	1984.10.20	新しい建物区分所有法について	波佐間信彦（住宅・都市整備公団九州支社福岡営業所業務第2課長）	1
		分譲住宅の管理について	鴨川哲夫（（株）団地サービス福岡支社分譲業務課長）	4
		討議のまとめ	山村謙一（福岡公団住宅自治協議会長）	9
		地域懇のうごき		12
		神通力		13
No74	1984.11.20	福岡県立美術館に望む	谷口治達（西日本新聞文化部長）	1

		資料Ⅰ 福岡県文化会館の基本構想	猿渡公一 (県文化会館職員・演出家)	5
		資料Ⅱ 福岡県文化会館 (県立美術館) の運用図		
		資料Ⅲ 改築計画図 1~4 階		
		資料Ⅳ 改築後各室面積一覧表		
		質疑意見のまとめ	中尾義孝 (画家)	11
		地域懇ニュース		14
		地域懇のうごき		16
		有為転変		16
№75	1984.12.20	高齢化社会を考える—美しく老いる—	中川哲也 (九州大学教授・医学部心療内科)	1
		中川教授の講演を聴いて	問田直幹 (福岡女学院短期大学長・九州大学名誉教授)	15
		地域懇のうごき		16
		盤根錯節		17
№76	1984.1.20	教育を考える (第76回地域講演要旨)	池田数好 (九州大学名誉教授)	1
		司会雑感	権藤与志夫 (九州大学教授・教育学部)	5
		地域懇のうごき		7
		付和雷同		7
№77	1984.2.20	女性の生き甲斐 家庭、職場、それとも...?	清山洋子 (西南学院大学助教授)	1
		価値観の変革を!! "女の生きがい" から考える	湯口恵 (YMCA 総幹事)	11
		地域懇のうごき		13
		春日遅遅		14
№78	1984.3.20	「家」を考える	有地亨 (九州大学教授)	1
		討論のまとめ	中西次男 (会社役員)	7
		地域懇のうごき		11
		白髪三千丈		11
№79	1984.4.20	地方財政と生活—九州地区財政の現状分析から—	松岡絃一 (福岡女学院短期大学助教授)	1
		松岡さんの報告についての若干のコメント	岩元和秋 (西南学院大学教授)	11
		地域懇のうごき		13
		呉越同舟		13
№80	1984.5.20	わが家の家庭教育	徳本正彦 (九州大学教	1

			授・教養部)	
		「やっぱりお母さん出番ですよ」ではないですか	古味堯通 (佐賀大学教授)	3
		討論の中から—教訓と課題—	門田見昌明 (西南学院大学教授・文学部)	10
		地域懇のうごき		12
		眼横鼻直		12
No81	1984.6.20	ソ連社会における市民生活瞥見	高田和夫 (九州大学助教授)	1
		司会者覚書	志垣嘉夫 (九州大学助教授・西洋史学)	6
		地域懇のうごき		7
		白式慰		8
No82	1984.7.20	世俗社会と宗教	稲垣良典 (九州大学教授)	1
		回教の祈り—司会者の思い出—	権藤与志夫 (九州大学教授・教育学部)	6
		地域懇のうごき		7
		宮中楼閣		8
No83	1984.8.20	中国人の思想—儒教を中心として—	岡田武彦 (九州大学名誉教授)	1
		「中国人の基本的な考え方を聞いて	木村晃郎 (画家)	6
		第八回総会報告		8
		地域懇のうごき		13
		放生会		13
No84	1984.9.20	設計は可能か—女の人生— (要旨)	野田寿子 (西日本新聞社文化部・詩人)	1
		設計は可能か・女の人生	野口郁子 (西日本新聞記者)	10
		司会者のまとめ	安藤延男 (九州大学教授・教養部)	13
		地域懇のうごき		15
		六〇年度役員紹介		15
		月見豆		17
No85	1985.10.20	青年は語る—我々に未来はあるか—	川端美哉 (福岡市役所国際交流課)	1
		青年は語る—我々に未来はあるか—	久木田純 (九州大学大学院博士課程)	4
		未来と国際化	玉井輝大 (福岡市役所企画課)	13

		討論のまとめ	中西次男（会社役員）	16
		地域懇ニュース総目次（№74～ №84）		18
		地域懇のうごき		20
		カナダからワオ	諸岡和房（九州大学教授・教育学部）	21
		切磋琢磨		22
№86	1985.1.20	教育改革について—臨教審問題を 中心に—	神田修（九州大学教授・教育学部）	1
		司会者のコメント	佐久間章（九州大学教授・教養部）	6
		地域懇のうごき		8
		天変地異		9
№87	1986.2.20	金融革新	深町郁弥（九州大学教授・経済学部）	1
		司会者のコメント	有吉泰徳（商工中金福岡支店勤務）	7
		地域懇のうごき		8
		政権交代		8
№88	1986.3.20	福岡県勢の活性化の方向と展望	八丁和生（社会問題研究所事務局長）	1
		福岡県勢の活性化の方向と展望 のまとめ	中西次男（会社役員）	5
		地域懇のうごき		7
		遍路宿		7
№89	1986.4.20	高齢化社会の医療	森下公平（森下産婦人科院長）	1
		司会者のまとめ	菅原暉子（KBC 記者）	3
		地域懇のうごき		6
		一気呵成		7
№90	1986.5.20	選挙のしくみを考える一定数は 正問題を中心に—	徳本正彦（九州大学教授・教養部）	1
		徳本先生の講話の前後	福留久大（九州大学教授・教養部）	6
		地域懇のうごき		8
		白砂清松		9
№91	1986.6.20	『家族幻想』について	河野信子（詩人・作家）	1
		司会者のまとめ	古味堯通（佐賀大学教授）	4
		地域懇のうごき		6
		羊頭狗肉		7

No92	1986.10.20	今日における労働組合活動の環境・条件を考える	菊池高志（九州大学助教授・法学部）	1
		「組合よ、元気出せ」—司会者の感想—	原田実（九州大学教授・経済学部）	6
		地域懇のうごき		8
		笑裡蔵刀		9
No93	1986.11.20	美術館と地域との結びつき	安永幸一（福岡市美術館学芸課長）	1
		質疑・意見交換のまとめ	中尾義孝（画家）	7
		地域懇のうごき		9
		神無月		10
No94	1986.12.20	統計調査とプライバシー	大屋祐雪（九州大学教授・経済学部）	1
		第八回総会報告		8
		地域懇のうごき		12
		内弁慶		13

※「地域懇ニュース」は、福岡県立図書館にて閲覧及びコピーができます。

【資料】

発会に際して

奥田 八二

多方面から御参集下さり、いよいよこの総合地域政策懇話会が発足することになりましたことを皆さんとともにお慶びいたします。議事次第の中で、この会の趣旨なり発足経過なりをよりくわしく御披露申上げることになりますが、発足にたずさわった人々を代表して私の方から、なぜこの会ができたかということを手短かに申し上げます。

四月の末頃、呼びかけ人の一人としてここにいらっしゃる木梨弁護士と私はある会議で同席する機会がありましたが、二人は期せずして来年の知事選はどうなるのだろうということをお話ししました。二人は以前からある「学者・宗教者・文化人の会」のメンバーで、その会が前回知事選に際し、候補者擁立に深くかかわった事実があり、四年後の今日も状況が似ているとも思われたからであります。その会は今も存続しておりますので、他団体から候補者選びについて問いかけられた場合、どう答えたらよいかということなのです。二人には名案はないので、会員のやや広範な活動的な方々に集っていただいて相談してみようということになり、六月にその会合がもたれました。ところが私どもが提起した知事候補云々の話題は、どうも性に合わないからやめにし、自由に、広範な地域社会の問題を出し合い、勉強し、一般に提言できる意見がまとまるなら、それを当局や住民にきいてもらうような集りを作ったらどうか、知事候補とか直接政治にかかわる問題は「学者・宗教者・文化人の会」におまかせして、われわれはもっと別の会を作ろうという意見に傾いていきました。

安定成長下の今日、地域社会におこっている問題はあまりにも多い。人々は、専門家であれ一般住民であれ、地域社会改善のために言いたいことを一ぱいもっている。知りたいことがいくらかもある。こういう問題について新聞、テレビ等を通じて日常的に私どもの耳目にふれる対策は、何とか委員会だの、何とか審議会だのというような、当局の権威又は財力のスポンサーづきのものが多く、新鮮味もなく、大衆を納得させるに足るものが見られないことが多いのであります。日常の私たちの周辺には、スポンサーづきでない、個々の、埋れることの多い正論がいくらかもあるのではないかと。専門家の権威をもたなくても非専門者の直感的な反応の中にも大衆的な納得のえられるよき対策への指針が見出されるのではないかと。われわれは、新しい会を作って、かよわい声を大きくし、埋れるかも知れぬ正論を表に出し、非専門領域の人々の鋭い直感を専門意見にかみ合わせるような場を作ろうではないかと。こういう意見がその集会の大勢を占めるため、ともかく以上のような趣旨をもつルーズな会を新規に作る方向に一步ふみ出そう、ということでその日は別れました。

その後、若い人たちを含め、積極的な、時間のとれる者が何回も集り、新しい組織を作るための討議を行いました。この総合地域政策懇話会は今日このような経緯をもって発足を迎えたわけであります。数多い日常の地域社会の問題について、非専門の人が圧倒的に多い。専門の人でも、すぐ隣接の専門については知らないことが多い。この懇話会は、そういう人達を知りたい、物を言いたいという欲求をもって、勉強し、勇気をもって発言してみることが期待されております。

詳細については後の議事に譲ることにし、ここでは、この会の関心の方向について、若干具体的な私の期待を申し述べてみたいと思います。私は炭鉱問題に永年かかわってきた一人ですが、ヤマがなくなった今日、炭鉱の資料等どうなっているかという点に、大きな危懼と不満をもっております。このことに関して県立図書館は十分役割を果たしておるといえましょくか。炭鉱の後始末問題一般について福岡県のあり方はこれでよいだろうか、不満は次々に出てまいります。筑豊のある市では市立図書館が炭鉱資料集めにかかなり努力しております。私は最近ある集会で、県立図書館と市立図書館の役割の違いについて正しく答えられる人が何人いるだろうかと設問したことがあります。炭鉱問題に限りません。埋蔵文化財の問題もありましょくし、教育問題となりますと、全住民にかかわる深刻な問題が山積しており、一々私が指摘するまでもありません。住宅問題があり水問題があります。これらにつきましては、在来の権威による政策に流されてしまうことがあまりにも多いと思われましょく。私たちは、こうした事柄に対し、従来にもまして何が正しい対案なのかを考える癖をつけたいわけでありましょく。そういうことができるなら、この懇話会は成功だと思いましょく。

本日は、この狭い会場にあふれるほど来ていただきました。お誘いに奔走した者たちの誤算で、窮屈な思いをさせております点、お詫びしなければならないわけですが、ともかく会場にあふれるたくさんの皆さんの御参集をいただいたこと自体、よろこばしいことだと感謝しております。短い時間ではありますが、経過報告や設立趣旨その他の議事を審議していただき、基調講演も準備しておりますので、それをおききしていただきたいのでありましょく。それらを経験していただくなかで、この懇話会がどのようなものとして発展していかなければならないかは、皆さま自身がお決め願えるのではないかと思っております。懇話会はたんなるおしゃべりの場であってもよいとすら思っております。

代表幹事あいさつというには、とりとめもないことを申し上げてしまいましたが、今後ともよろしく願いましょくいたします。

ありがとうございました。

(おくだ はちじ 九大教授・教養部)

※「地域懇ニュース№1」1978年9月20日号より転載。

【資料】

福岡に博物館を

奥田 八二

福岡に博物館が欲しい。

市立でいい。県立であればなおいい。両方あればもっといい。県下の他の市、又は市町村連合の博物館があるのもいい。

博物館には歴史博物館、民族博物館、自然史博物館、科学博物館、産業博物館その他いろいろの種類があろう。ここではどれとは限定できない。どれもあることにこしたことはなし、自治体等の能力によっておのずから限定されるだろうが、それはやむをえない。

なぜ博物館が欲しいかという、私の動機は多分に教育的見地からである。専門家的、研究者的な関心から博物館建設の要望がでるのも至極自然であろう。が、私はその前に住民の一人として、この地域で育つ子供たちのために、この地域で生活する平凡な大人のために、まずは教育的機能をできるだけ大きく果せる博物館が構想されたらよいと考えている。

そのような博物館は、系統立ったものでなければなるまい。系統立ったという意味は、一定の教育目的に沿って、できればAからZまで見られるようにしてあるということである。地域の特産品の、偶然的、断片的な列品館ではいけないという意味である。もちろん地域の特産品は必須ではあるが、それが、どういう時系列のなかで意味をもつのか、全体の中でどういうふうの部分なのかということがわかるようになっていることが必要だと思うのである。

たとえば歴史博物館で、ある物が、専門の考古学者がみていかに価値が高いかの理由が長々と説明されたとしても、子供や一般の素人には、それほど興味のない単なる土器の破片としてしか理解できないなら、あまり意味がない。その前後左右が同時にわかるようにされた方がよい。そのためには、全国の他の地域からその前後左右を集めるとか、模造品を作るとかの努力が必要だろうし、またそのためにこそ博物館の運営には専門家が深く関与すべきだし、専門の「模型工場」と専門職人が配置されなければなるまい。

こういう教育的見地からする博物館は予想外に広大な敷地と建物とを要するであろうから、既存の古い建物を応用して「仮住いし」徐々に拡張したらというわけにはいかない。狭い土地なら高層化を考えてもよい。

模型工場のほかに教室がいくつか欲しい。博物館は学校の子供の集団見学のメッカでありたいし、集団成人教育のセンターでありたい。見字に先んじて、教室でスライド等を使った短時間の講義を開いた方がよい。講師はいうまでもなく博物館専属の研究者であるべき

で、若い体力のある助手クラスの人が説明者として陳列現場を案内したらよい。この人達は館内に研究室をもち、自分のテーマに従った研究を傍らやっているという形がよい。

たとえば福岡の歴史博物館の場合、九州を背景とした福岡地域の人間の生活史、文化史、政治史などが、太古から現代まであらまし説明できるようになっていることが望ましい。明治・大正・昭和の百年余についても、福岡について私は何も知らない恥かしさを告白せねばならないが、そういうことなら博物館へ行けば一通りわかるようになっていたらいいと思う。

展示物を一定のテーマに従って部分的に周期的にかえていくとよい。

教育的見地からといったが、私は、教育は単に知識を伝え頭脳を訓練するだけではなく、心を養うという側面があると思う。福岡の博物館が県民に、「地域に根ざした心」を養うことを期待したいのである。物質的には豊かになりすぎたとさえいえる今日、その物質力を、もっと心を養う方面に使うよう発想を転換したらどうだろう。これも自治体の重要な仕事の一部ではあるまいか。

(おくだ はちじ 九大教授・教養部)

※「地域懇ニュース別冊No1 地域に根ざした博物館を考える」1979年8月7日号より転載。

【資料】

地域の復権を求めて

——地域に根ざした博物館を考える——

奥田 八二

(一) 博物館の必要性

文部省の社会教育資料によりますと、余暇施設のなかで、ギャンブル施設、遊戯場、各種学校、劇場などで民営分の比重が大きく、教養、文化施設、日常性スポーツ施設など公共性の高い施設の充足率が低い、とくにオープンスペース（都市公園）の充足率は著しく低い、との指摘があります。これは欧米先進諸国と日本の大きな違いの一つです。私的利益の追求が優先し、公共的利益の追求が後まわしにされている日本の政治的体質、行政の熱意の低さが、ここに出ています。

総理府の教育に関する世論調査によりますと、生涯教育のために行政に要望する事項のなかで、「一般市民のための教育・文化・スポーツ施設およびテレビ・ラジオの良い番組」に次いで「美術館・博物館・図書館・音楽ホールなどの施設」に対する高い要望が出ています。また、図書館や博物館に対する要望の強弱を年齢階層別にみますと、一五歳から二一歳層（高校生・大学生）が他の年齢階層に比して、ずば抜けて強い要望をもっているという結果が出ています。

このような社会的要望に対し、現に、学校以外の社会教育的各種施設がどれほどあるかについては、文部省の「わが国の教育水準」が次のような調査結果をまとめています。（表参照）近年これら施設はかなり急速にふえつつあるとはいえ、狭小なものが多く、施設の利用・運営は未熟とであるといわねばなりません。これらの施設のどれもが日本中に散在していて、どこにあるだろうと思うほど身近ほど遠い存在ですが、私たちの主題の博物館の寥々として少いこと、かくのごとであります。

社会教育活動の施設数

公民館（公私立）	15,752
うち330㎡以上	6,249
図書館（公私立）	1,066
博物館（国公私立）	409
青少年教育施設（公立）	735
うち青年の家	318
婦人会館（公私立）	90

社会体育施設（公立）	19,835
うち運動広場	5,513
〃 コート	2,436
〃 体育館、柔剣道場	3,067
〃 プール	2,644
視聴覚ライブラリー（公立）	544
文化会館（公立）	411
国立青年の家	12

（注）昭和50年の数字、但し文化会館は49年

（二） 博物館に対する当局の態度

博物館行政が貧弱であることは当局もよく知っています。ここでは二つの資料から、そのことを見ていただきます。

1 経済審議会人間開発研究委員会「情報化社会における生涯教育」（中間報告、昭和四七年五月）

博物館は、美術館、歴史館、科学館、産業館、動物園、水族館の名称を問わず、それぞれ実物・模型の資料を一般公衆の利用に供したり、その資料に関する調査研究を行うもので、入館数は近年大幅に増加し、一般の関心が増大している。しかし、多くの博物館が資料や教育機能の不足に悩んでいる。歴史、芸術、科学等に関する実物教育は知識を啓培し、情操を豊かにし、創造力を養うものであるから、博物館を単に収集品の保存、展示の場として考えるにとどまらず、わが国未来の産業、文化、生活を創造するための学習の場としてとらえることが重要であり、次の点に留意する必要がある。

（1）施設・設備の近代化・事業の充実（略）

（2）博物館の地域格差を解消するため、都道府県や大都市はいうまでもなく、小都市や町村においても、地域事情を考慮しつつ特色のある博物館を設置する必要がある。（後略）

（3）博物館と学校教育または社会教育の組織的な学習活動との結びつきを図るべきである。

学校教育との関係においては、教育課題との関連を考慮し、博物館を有効に児童・生徒に利用させ、社会教育との関係においては、社会教育施設や社会教育関係団体の教育活動に結びついて、見学、研究、学習の場として利用されるよう連絡提携につとめるべきである。

（4）私立博物館については、税制上の優遇措置その他の国の積極的な育成策を講ずる必要がある。

2 第三次全国総合開発計画（閣議決定、昭和五二年一月）

▲ 国土利用の均衡を図るための基盤整備に関する計画課題

（1）定住構想の基礎

（前略）国土利用の均衡を図るという視点に立って、教育・文化・医療等の機能の地域的な適正配置……を進め（後略）

（2）教育・文化・医療施設の適正配置

（Ⅰ）大学等高等教育施設（略）

（Ⅱ）文化施設

（整備の基本的方向）

物の豊かさの充足から心の豊かさ、生活のうるおいを求める傾向が次第に高まり、地域社会においても、人と人との連帯が求められている。

また、古くからそれぞれの地域で風土に根ざした独自の文化が継承され、創造的活動も行われているが、中央からの新しい文化が流出し、中央型の文化が地方においても優位な状況にある。更に、外国文化の吸収、全国的な文化情報の集中などにより、中央における文化の発展が一層促進され、文化における中央と地方の格差が拡大してきた。このことは文化施設の配置でも同様であり、博物館・美術館のうち国立にかかるものをはじめ高度かつ大規模なもの、国際会議場、大規模な劇場、集会場等は東京に集中し、大阪及び京都がこれに次ぎ、地方との間に大きな格差がある。

（中略）地方における文化施設の整備は、文化の伝承、創作活動の奨励、文化の交流および鑑賞の機会の増加を図るとともに、住民が文化活動に参加するための「広場」として計画する必要がある。

（文化施設の配置）

（Ⅰ）全国的な文化施設として、歴史・民族資料の収集展示のための施設及び大衆芸能の芸能のための施設の設置を進める。また、その他の現代舞台芸術や古典芸能のための施設等の整備についても配慮する。これらの施設の配置については国際美術館等を大阪に設置するほか、地域（ブロック）施設とあわせ全国的に適正な配置を図る。また以上の文化施設の整備に当っては、環境・利便等の面で都市計画等と整合したものとなるよう十分配慮する必要がある。

（Ⅱ）これらの高度な文化施設を中心として、定住圏においては、地域の状況に応じ地域の文化活動の振興を図るため、文化会館、博物館、美術館、図書館、文化財の保存・活用のための施設等について、総合的に整備を進めるとともに、定住区においては、住民が身近なところで自ら文化活動を行うことができるよう公民館等各種施設の整備を行い、史跡、名勝、天然記念物、埋蔵文化財等の保存整備を図る。またこれらのほか、広く民間の手による多種多様な文化施設の設置とその活用を促進する。

（Ⅲ）これらの施設の体系の整備とあわせて、博物館、美術館等の内容の充実・機能の高度化を図るため、研究者の交流、収蔵品の交換等を行う。また、地域において文化活動及び文化団体等を支援することに努める。

右に見たとおり、行政当局も博物館の整備充実及び民間の同種活動の支援の必要を、いま

十分に認識し、国政レベルの計画に織込んでいることがわかります。特に三全総が、基本的態度として「物の豊かさの充足から心の豊かさ、生活のうるおいを求める傾向が次第に高まり、地域社会においても、人と人との連帯が求められている」といっている点は歓迎です。

私たちが提唱する「地域に根ざした博物館」の構想が、時宜にかなったものであるとともに、当局からも住民からも支持されることは確実です。

(三) 博物館に期待するもの。

博物館にはいろいろなものがあることは周知のとおりで、私たちが提唱する博物館がそのうちのどれであるか、どれに優先順位をつけるかについては、今は何もいえないし、いうべきではないでしょう。しかし博物館一般については、まず誰にも合意していただける注文がありうると思います。私の考えを何項目か挙げてみることにします。

(1) 「物を作る」政治から「心を作る」政治への傾斜の急務

日本の過去の高度成長は政治の「物を作る」志向の強烈さの成果という一面をもっていました。それが「心を作る」政治を置き去りにし、国民の心を荒廃させる結果を生んだといってもよいと思います。教育行政に限っても学校教育に偏重しすぎ、学校教育も「生産能力主義」の偏重に陥っていたといえるでしょう。これは為政者の発想の貧しさのせいですし、自治体の首長も中央追従に寧日なく、地域的主体性のある教育という見識が欠けていたからではないでしょうか。三全総の指摘もあることですし、私たちは、このような教育文化行政の貧困から脱出するための一つの提案として、「地域に根ざした博物館」を採りあげたいと思います。

(2) 地域に根ざし、開かれた博物館

構想される博物館は、あくまで地域の文物の収集・展示・研究が基本であるべきべきだし、地域住民の「心を養う」ためのものでなければならないと思います。また、そのためにも博物館の企画運営にあたっては、中央官僚の独断、地方役人の中央追従を排し、地域住民の英知と熱意による参加を通じて企画され運営されなければならないでしょう。その過ちを最少限にするためには、不断の研究・調査・国内外の他の博物館との交流を忘れてはならないと思います。

(3) 公共の財産

博物館が地域住民の期待にこたえて、その本来の機能を発揮するためには、少なからぬ予算が必要ですし、住民の積極的協力が必要です。地域住民が地域の公立学校に関心を寄せ、これを支えてきたのと同様の関心と協力が、地域博物館に対しても、示されなくてはならないでしょう。地域住民は博物館の建物や収蔵品や運営を、みんなの財産だと思えるようにならなければなりません。またそれは子孫への贈り物となりましょう。

(4) 「容れ物行政」を排す

近頃の中央追従の地方行政はいずれも「容れ物行政」の弊に満ちています。文化施設にし

ろ、社会福祉施設にしる、最近はかなり多方面の建設が進められました。しかし、行財政当局の一貫して変わらぬ基本方針は、「投資的経費」の伸張を図り、「消費的経費」を極力圧縮することです。「投資的経費」は施設建設費で、「消費的経費」の代表は人件費です。巨額の国費・地方債が公共事業に投じられ建設ブームを呼び、その一部として公民館や文化会館や青年の家が建てられます。博物館もその中に入れてもらえるなら結構なことです。

しかし、地方首長が「顔」を聞かせて中央から補助金を取り、地方の建設業者その他に発注の恩を売り、施設建造の功名を住民に披露することにメリットを感じ、その施設運営と住民利用にはほとんど無頓着で、次の施設建設に奔走するという例は少なくありません。そして地方自治体の財政は万事火の車ですから、首長は施設利用者からの使用料を値上げしたり、従事者の数を削減したり無資格者を代置することによって「人件費」を切り詰め、財政の赤字克服成功と住民に胸を張る。住民は住民で、このような首長が「手腕がある」と考える。こうして横行するのが「容れ物行政」なのであります。

博物館の運営には、「所、物、人」の三拍子がそろわなければなりません。「所」や「物」については、他の論者に譲るとして、ここで強意したいのは、「人」についてであります。博物館が「開かれた」博物館として、その企画・運営の妙が大綱的に保障されるにしても、その上に、日常利用者に接し又は利用者の目の届かぬ所で黙々と利用者サービスに挺身する従事者・学芸員が充実しており、その十分な献身が期待されます。それには「人件費削減」に胸を張るような行政では困るのです。

（四） 博物館の種類と数

「地域に根ざした博物館を考える」（地域懇ニュース別冊No1）の末尾にかかっていますので、これで大綱だけですが、ご理解下さい。一九七四年三月現在調べです。

（おくだ はちじ 九大教授・教養部）

※『地域懇ニュースNo12』1979年9月20日発行より転載。

【資料】

博物館建設推進運動のために

奥田 八二

(一)

私たちの地域懇が「地域に根ざした博物館」づくりを提唱してから一年になる。「井の中の蛙」みたいなもので、旗^マ上げしてみてもはじめて、いろいろな人たちがいろいろの角度から博物館について考えておられること、またいろいろな団体がすでに博物館づくりについて提言されていることがわかったし、大小異種様々な博物館又は類似の施設がすでに機能していることがわかり、自分の既知の狭さを、かえって恥じ入った次第であった。

ただ弁解がましくいえば、私たちの周辺で目につく「博物館等」が、現存しても、少なすぎ小規模すぎるように思う。私は、ここ一ヵ月ばかりの間に鹿児島と高知に行く機会があったが、この二つの市には、いやでも目を引く形で博物館が「ある」。それほど大きいとは思わないが、ちゃんとしたものと思う。福岡に住んでいて、それが無い。代々の知事や市長は偉い人だったのだろうが、誰も博物館づくりの努力は十分でなかったらしい。福岡には、よそから来た人にも、地の人にも、目につくほどの博物館があるのが当然で、ない方が不思議といってよいであろう。遠来の客があった時、何か見て帰ってもらおうとしても、福岡市にはそれが無い、とよくいわれる。福岡市の近代百年の歴史のなかで、そういうものを「造る」という発想が、なぜ政治を動かすほど有力になっていかなかったのだろうかと今でも不思議に思う。

そういえば、福岡という所は市民のおとなしい所だと、外の人が時に指摘する。住民運動があまりない。幼稚園や保育所は少いし、街路も汚なく個性がない。市民が燃えようとしないのである。つい先年の「水飢饉」は全国的にも歴史的にも稀有の事態だったが、あのようになるまで放置されていたし、市民の多くは「天災」みたいに解釈して、行政責任を追及しようという強い動きもなかった。街路は年がら年中掘りくりまわし、小規模な植木を植えたり枯らしたり、夏がくると路傍に雑草が紙屑を押しよけるように茂る。広告・看板がやたらと多く、電柱など公的構造物はハリ紙だらけで何ヵ月も放置してある。道を掘りくりまわす予算の何十分の一かで、このように汚い街路を清掃することができるのではないか。舗装が何十メートル出来がおそくなくても、タバコの吸殻や菓子のカラ箱、紙屑、雑草のない街路の方がよいのではないか。街路に高価な植木を植える前に清掃できるのではないか。緑化運動の前に、「ゴミで街路を汚すな」と市民に呼びかけるべきではないだろうか。

高知市の中心街で朝早く日曜日に街路を掃いている人にきいたら、あれはボランティア

だということだった。私は不思議にさえ思えた。労働組合がやっているときいてさらにびっくりした。だが、あり得てもよいことだと思った。恐らく市民が、自分の住む町を愛するのだろう。旅の私にはよくわからないが、そのように思いながら福岡の街路のことを回想したのであった。

労働組合といえば、教員組合がストライキをしたというので、参加者の「処分」を徹底的にやるというのが福岡らしい。秩序を重んじ、けじめをつけるのはいいとして、街路の雑草や紙屑の清掃にも、徹底した秩序をつけてくれれば、市民はもっと心休まる気持ちがあるのではないだろうか。

（二）

福岡の人が、わが住む街に無頓着な理由として、福岡がいわゆる「支店経済」たることが指摘される。ハカチョンという言葉もあるときく。つまり多くの市民にとって、わが住む町は「仮の宿」でしかないというのである。この見方はポイントを言い当てていると思う。福岡は、中央大手の支店、中央官庁の分局など主たる会社、銀行、官庁などはほとんど何でもがそろっている。というよりは、それらが地ものを圧倒して大所を占めているのである。もっと小さな町は、小さいなりに地ものが集まって町の主要部分を形づくっているのだが、福岡では地ものはかえって小さくなっている。しかも地ものが中央からの「出先」的な存在に対して張り合い、せり出るといふ気力がない。

「支店」的人間は、中央の指令で動くし、いつも中央の顔色をうかがい、「仮の宿」に居る間、大禍なくやればよいという気持が強く、「人間いたる処青山あり」の気概はもたない。だから、わが住む福岡がどうあろうとあまり気にならないであろう。

板付からの空港市内連絡バスに乗ると、間もなく「博多夜舟」のメロディ伴奏とともに、福岡市が博多伝統の情緒をたたえた町である旨のバスガイド案内の吹込みテープが流される。昔のことはそれでよいが、今の福岡が個性豊かで自負するに足る町であるとの宣伝が聞けないのは淋しい。明治百年の近代史の中で、福岡人が形成した福岡を他国の人に自負できないのであろうか。

九大に育てられて私は四〇年近くなる。九大が全国屈指の国立大学であることは誰でも認めるであろうが、九大の九大たる個性がどこにあるのか、私にはその自覚が未だにない。屈指に値するとの自負も持てない、ただ国立大学としての序列が上の方にあることだけしかわからない、福岡市と九大、福岡県と九大の関係は、ただその地域内にあるというだけで、県民や市民がこれを自分たちのものと考えているふしは見当らない。試験で他郷の人が多く割り込んできて、子弟がそう簡単に入学できないということで疎遠なのであれば、それはおかしい。大学が平素市民に開放されていないからである。国立だから県民や市民に開放する必要がないということにはならないはずである。だが平素それを全くといっていいほど大学側もやらなければ市民の側も要望しない。九大は市内に、国のものとして、一つの場所を占拠しているだけなのであろうか。

福岡に来て、「九大は？」と問うと多くの市民は医学部付属病院のこととして対応する。少し開けた人は工学部と医学部のどちらかとききかえす。他の学部は全く意識にない人が多い。それは九大医学部が市民に開放された形で存在していることによると思われる。市民の九大に対する意識は、親近の度によるのであって、古いからではないと思う。

九大は医学部以外は日常的に市民に開放されてこなかったし、今でも開放する気はない。市民もそれを期待していないようである。国立大学は国家目的で設立されたに違いないが、それは地元民に毅然としている理由とはならないはずである。だのに九大関係者はどうしてこのことがわからないのであろうか。地元民への開放など話題にしようものなら、部内会議で相手にされないだろう。もちろん、医学部が例外的に開放されているというのではない。その付属病院が研究上、市民を材料するためでしかないのではないかと思う。

九大のような国立大学は、ナショナルな性格をもつのは当然だが、もっとローカルな性格があつてよい。近頃の九大卒業生の就職状況は多少かわってきたらしいが、大抵一流中央企業を目指す傾向が強かった。地元中小企業は地元私大がまかなった。国立大学の研究教育の中味が大企業向けであることもたしかで、中小零細企業は、農業を除いて、国立大学の研究応用の外にあるかのごとくである。研究教育がこのように高邁なものも結構だが、もっと日常卑俗の中にも真理や正義があることを知るべきだと思うのである。

九大では、研究者も学生も、多くは東京を向いている。地元をもっと見つめる者がいてもよいのではないか。一流を目指すのは勝手だが、一流を目指さない者がもっと多くあつてよいのではないか。

福岡の天神がリトル・トーキョーになる必要はない。これと同様に九大がリトル・トーキョーになる必要はあるまい。あるいは実際になれないのに、なれるかのような錯覚をもっているとしたら、早くその地域性にめざめたらよいと思う。

(三)

「地域に根ざした博物館」とはいつてはみても、その意味の理解は万人一様ではなからう。ただ、九大は地域に根ざした大学ではないと思うので、私の「地域に根ざした」という意味の理解は、福岡における九大のごときであつてはならないという程度の理解で、まずは足りると考える。九大をいわゆる「地方大学」に転落させた方がいいということではない。ローカルを忘れたナショナルでもいけないし、ナショナルを忘れたローカルでもいけない。ローカルを通してナショナルなものが発見できることを知ろうではないかと、という意味での脱皮である。「地域に根ざした博物館」というのも、これと同じである。

われわれが目ざす博物館の建設は、もちろん私立ではなく、国立または公立である。国立級の博物館は県、市立級のものより大規模でなければならない。が、国立の博物館であつても「地域に根ざした」という限定が付与しなければならないだろう。それは地域性・歴史性の両側面から見て個性に豊んだものでなければならない。

だが、実際にはこのような限定には大きな困難が伴う。博物館の建設運営には巨額の資金

と年々の経費が必要であろう。篤志家の多額の基金があれば別だが、でなければその実現には大きな政治力が不可欠である。博物館の実現にとって鍵をにぎるのはこの政治力である。

だが何よりも、この政治力は既存の出来合いのものではなく、大衆的な盛り上がりがあることが望ましい。それは博物館の種類、規模、場所、運営などを天下りの官僚的にして、結果として博物館を殺してしまうことにしないための社会的保証である。「地域に根ざした博物館」は「地域に根ざした政治力」によってはじめて理想的に実現しうるのではないだろうか。

私たちは今、「地域に根ざした博物館」造りに取組もうとしている。「九州に中核的役割を担う博物館を」ということで、十あまりの団体とその周辺に集まる個人によって構成される「博物館等推進会議」がこの四月三日に設立総会を開く予定だが、私たちの地域懇もその構成メンバーに入ることになった。これは福岡県内で十余年に亘り進められてきた国立九州歴史美術館の誘致運動をも、発展的に継承しようとするもので、運動の盛り上がりとは成果は大いに期待したいし、そのためには私たち地域懇も構成メンバーとしても小さからぬ責任を感じる次第である

今日、九州・山口の地域で、長崎、佐賀、熊本、宮崎、鹿児島、山口、沖縄に県立博物館があり、ないのは福岡と大分の両県だけという。全部まわったわけではないが、それぞれが各県固有の政治的熱意を傾け、個性ある博物館を作っているらしい。福岡と大分には、大きな製鉄コンビナートと関係がありそうに思えるほどで、県民はもういい加減に経済より文化に関心を向け、熱意を示してほしいと思う。

西日本新聞の伝えるところによると（三月十日号）、現在、九州・山口各県に総合、歴史、科学博物館が二十二、美術館が八、それに郷土館や資料館を含めると博物館といえるのが大小百をこえ、構想、調査、設計、建設等段階の差をもちながら建設の進行形にあるものが次の十一だという。

（福岡県内はそのうち六館を占めている。）

- 北九州市自然史博物館（構想中）
- 飯塚市歴史博物館（七月着工）
- 田川石炭記念公園（基本計画）
- 八女市歴史民俗資料館（構想中）
- 久留米総合博物館（構想中）
- 福岡航空宇宙博物館（基金募集中）
- 佐賀市歴史博物館（構想中）
- 長崎県立自然史博物館（構想中）
- 球磨森林博物館（熊本県、協議中）
- 大分県立総合博物館（調査中）
- 明治百年記念館（鹿児島、基本計画）

いずれも大規模といえるほどのものではないが、「地方の時代」というにふさわしく、地域の情熱と個性をあらわしており、見ようによっては、八〇年代を先取りしようとする動きであるといえよう。

われわれはこんどの「博物館等推進会議」を通じて、福岡に中核博物館を作ろうとしているのであるが、そのために一方で、博物館の種類、場所、規模、運営等について専門的立場からの構想を練ると同時に、それとの見合いで、それを実現するために、どのような政治力を用意せねばならないかを真剣に検討する必要がある。どんな理想案も、実現のための政治力抜きには画餅に帰するであろうし、どんな政治力で実現しても、専門的立場からの周到的な構想を抜きにしては生きた、地域住民のための博物館にはならないであろう。

(四)

今「博物館等推進会議」が考えている「中核博物館」は、県立ではいけないわけではないが、勢い国立を旨ざすことになるであろう。九州全域の歴史と自然と文化が構想の中に浮んでいて、右にあげた進行中の諸構想よりも、かなり広域を対象にするに違いないからである。中核的という意味は、現に九州・山口各県にあるといわれる百をこす博物館等が相互に孤立するのではなしに、協力体制を組んで運営のネットワークができることを夢みていることから出ている。もちろん、どれにも地域性と個性と独立性があつて、かつ協力しあえることを願っている。そのような意味での「中核的」であるから、それは国立であることが望ましい。あるいは、そういう役割をもつ博物館を造ることは国の責任でもあるというべきであろう。

西日本新聞は三月十日から「地域に根ざす、博物館の時代」シリーズを八回にわたって連載したが、この種のキャンペーンは、同新聞で正月以来二度目である。前のは文化財の散逸、死蔵、私蔵、破壊のなげきを伝え、いかに博物館建設が必要であるかを訴えたものだったが、こんどのシリーズは博物館建設の政治力学というか、建設の熱意の結晶の仕方というか、そういう角度からの訴えであった。

このシリーズの伝えるところをかりると、日本博物館協会の調べで、博物館相当施設を含め全国に六〇年代初頭に二百七十三館あったのが、昨年四月には五百十七にふえているという。資料館などを加えると千六百をこえるらしい。「博物館時代」の開花期といってもよく、われわれの「博物館等推進会議」の運動は、遅きに失すともいえるが、これからがそれらのあるべき姿を反省し、模索し、定着させるという観点に立てば、むしろ時宜をえたものであるといえる。

今、国立歴史民俗博物館の新建設が千葉県佐倉市に進んでいる。これは成田空港建設協力の見合いとして、全く政治的に投げ与えられたものらしい。かなり大規模なものだが、どう見ても「地域に根ざした博物館」とはかなりの距離がありそうだ。もう十二年も前、福岡県政財界を中心に「国立九州博物館設置期成会」が発足、陳情運動が展開されたが、これが矮小化された形で昭和四十七年に九州歴史資料館（太宰府）として実現した。が、これは鏡山

館長もいうように博物館というよりは出土品の保管庫たるに止まっているようだ。小さくて出土品があふれ出し、九州の名にも値せず、福岡県はおろか太宰府の資料館でしかないというのが当事者の歎きである。

そういう有様なのに千葉県佐倉に先を越され、こんどは名古屋国立近代美術館構想が、ものすごい陳情攻勢をバックにクローズアップされてきている。総工費百六十億円が予想されているというから、さきの飯塚市歴史博物館の三十三倍である。これなら、われわれが期待する「中核的博物館」たるにふさわしいであろうが、名古屋にまた先を越されなければならないことはない、というのがわれわれの気持である。

われわれの「博物館等推進協議会」が名古屋級の国立博物館を狙っているのかというと、今は何ともいえない。国立か県立かというような問題はまだ流動的であっていいと思う。東京には能楽堂と第二国立劇場、大阪には文楽劇場の構想があるときくが、これら国立大規模文化施設は、名古屋のそれと同様に、いずれも、われわれ「博物館等推進協議会」が年頭においている「博物館」とは異なる種類のものであって、国立という限りでは予算の競合はあっても、構想の競合はない。福岡にはすでに市立美術館が昨年十一月にオープンしたが、これほどの規模の美術館ができて、博物館の建設の必要性は一向になくならない。だから、九州の中核的博物館という構想は、名古屋美術館の猛運動や大阪、東京の文化施設の構想にもかかわらず、まずは国立のものとして推進するに値する。ただ、何が何でも国立をとということで、はじめから巨大な規模を構想して、「棚ボタ」的期待をもつのではなく、財界はもちろん地元県市の財界も一緒になって、自分たちの力で何ができるかということを考えるのが先決だろうと思うのである。

私見をいえば、この運動には何とんでも県が責任感をもってはまりこむべきだと思う。その意味では、われわれの協議会は県を動かす力を結集すること、県を納得させる構想を練り上げることをねらいとすべきである。必要なら、県当局または県ブロックを先頭に国に陳情する場合の後押しになればよい。最終的には知事や市長、代議員等政治の場にいる人物が、大衆的な運動の熱意をバックに、奔走するようにならなければならない。国がしないなら、自分たちで何ができるかということをつねに考えながら、国を動かすようにすべきだろう。

（五）

どのような博物館をどこに造るかという点について、今の次元でわれわれの周辺で議論が熟しているわけではない。期待される博物館の具体的構想は、種類、規模、設計、運営についてそれぞれ専門的見地からの検討が急がなければならないだろうし、場所については地元の利害とともに、利用者の利便も考えた立地のための特別の検討が必要であろう。とくに立地問題では対立や曲折は予想されないでもない。

それらを抜きにして私見をいえば、理想は遠大なのがよいから、博物館の種類は総合的なものである方がよいのではないだろうか。民俗、自然史など独立別個にする必要が生じたら

発展の中で改めて構想すればよい。

場所は、大変困難を伴うであろうが、利用者のことを考えて交通の便を抜きにしないことが肝要だろう。大学などは少々都心から遠くてもいいが、博物館はそうはいかない。それというのもわれわれが博物館に期待する社会教育的機能が、日常的大衆的であるからである。陳列、収蔵、研究のためなら少々都心から遠くてもいいが、教育のためなら都心に近いほどよい。立地政策上、教育機能を犠牲にしなければならないようなことがないようにしたいものである。

博物館が大きな緑地の中にあり、市民の憩いの場にもなることを希望する向きも少なくない。それは全く同感で、構想を練るに際し、必要な環境条件としなければならないであろう。

(六)

最後に、われわれ博物館建設運動が時宜にかなったものであるとの見解を示しておきたい。昨年六月の東京サミットに先立ち、ECから日本人をさして「ウサギ小屋に住む働き中毒」なる非難文書が出されたことは新聞報道などを通じて周知のことだろう。これは決して、日本の政財界要路の人達が受けとったように、日本への内政干渉でもなければ、事実の誇張でもなく、多少のユーモアをまじえての日本人の生きざま批判であり、貿易関係をもつ隣人として共存していく場合の、日本への注文である。貿易摩擦が引きつづき問題になる限り、こんどのベネチアサミットにおいても同様の注文がくりかえされるであろう。

いわんとするところは、日本があまりにもエコノミックに立ちまわりすぎ、文化環境を二の次においているということである。教育も技術に偏し、社会科学や人文科学を軽視しているとの批判が既にOECDから出されていた。労働時間は過長で憩いがなく、収入のうちの貯蓄が高すぎ内需が貧弱であり、企業は国家と癒着して効率主義に徹し、自然環境やエコロジーの破壊の抗議に冷淡である。等々。ヨーロッパ人にとっては、このような隣人と貿易を通して交際するのは迷惑だから、もっと文化的・人間的な香りを高くしてくれないかというのである。

欧米を尋ねた人なら誰でも気がつくであろう。日本の町並みの汚なさ、文化的施設の貧弱さを。ECの「ウサギ小屋」論は、日本が後進国であり欧米に追付くのに必死になっていた時代ならともかく、今の日本はすでに経済大国になっており、欧米に追付くどころか、一部では追抜くまでになっている。なのに、まだあくせくエコノミー一本槍で海外市場を攻めまくっているが、目ざわりだから、もっと文化人として足もとを見つめたらどうかというわけである。

もちろん、われわれは欧米人にまねる必要はない。が、この「ウサギ小屋」論の意味するところを理解する必要がある。われわれにはわれわれの日本の文化のあり方が独自にあつよい。が、日常の努力と関心が、ここしばらく「物的生産」と「企業的能率」に注がれすぎていたことは確かで、いまだにその惰性から抜け出していない。企業家や政治家の頭が「物

ぼけしているくらいである。今はすでに、資金や資財を、企業のおよび財政的には「無駄」と思っても、国民的文化的施策により多く注ぎこむゆとりが出来たし、そうすることが国際的に平和共存するのに役立つはずである。

ただ当面する経済・財政環境は「曇り後雨」とでもいうべき状況にある。

週休二日制にしても遅々としてその前進せず、「働き中毒」たることが、貿易立国の日本にとって、高価な石油代金を支払わなければならぬ日本にとって不可避であるとの議論が財界には根強い。また周知のように「財政再建」の課題が、国及び自治体に重圧を加えており、公務員のサービス、福祉、文化の各施策はかえって削減をせまられている。こうした気象配置は、博物館の建設推進にはまことに逆境ともいえる。

あるいは国際環境は、一方では日本の「安保タダ乗り論」と相まって軍事費の増強をせまっているかのごとくであり、この気流に乗る政治風潮も博物館建設にとっては逆境である。

しかし、もっと大局を見ると、長期予測としては、さきにみたとおり、博物館建設推進は時宜にかなったものであると判断できる。さまざまな気流のどれが優勢になるかである。地方中小都市の例をみればわかるように、多くの首長は文化的施設の建設にむしろ積極的である。これは逆の気流にあまり頓着しなくてすむからであろう。

博物館建設には理想や期待よりは、現実的政治の力がより大きな要因として働くということは事実である。しかし、それは各地のプランのうち、どれがどれに優先するか、そのためにどの部分の政治力がどれに打ちかつかというような競合関係もさることながら、右にのべたような、エコノミックな面に注意力を注ぐ政治力の中に、文化的な政治力をどう割りこませるかということが第一義的である。

したがって、われわれの博物館建設の努力は、名古屋をおしのけたり、大阪や東京のプランの挫折をはかるといようなものであってはならないであろう。それはあくまで正攻法で博物館建設の必要性を訴えて住民の支持をひろげ、それでもって国政又は県政の姿勢を博物館を中心とする文化行政にシフトさせていくことである。それは文化運動であると同時に一種の政治運動でもある。それだけに、この運動は日常的サロンのとどまることは許されないし、それぞれの団体及び個人のもつ関心と力量に応じて、前途に横たわる様々な困難が意欲的に克服されていかなければならないのである。

（おくだ はちじ 九大教授）

※「地域懇ニュース№18」1980年3月20号より転載。

【資料】

当面の博物館設立運動の経過について

奥田 八二

『地域懇ニュース』No18（本年三月二十日号）で、私は「博物館建設運動のために」と題して書き、その中で「博物館等建設推進会議」が、四月三日に設立総会を開く予定ということ報告しました。

予定どおりこの会議は福岡市天神ビルで設立総会、第一回総会を持ちました。当日は、県内の財界、学者、文化団体の代表約百人が集まり、経過説明、趣意書、規約の順に議事が進められ、一括これらが採択され、次いで役員選出、活動方針などの提案、採択があり、参加主要団体の決意表明ののち、アピールを採択して総会行事を終わりました。総会のあとシンポジウムがあり、これから建設を目指す博物館について貴重な抱負・示唆が披露されました。

以上は四月三日におこなわれた博物館等建設推進会議の発足行事の流れですが、その内容につきやや立ち入って報告しましょう。

この推進会議の設立は昨年十一月頃から構想が具体化されていたものですが、それには福岡にある既存の各文化団体が以前から、それぞれの立場から博物館の建設を要望し、運動を進めていたという前史があったのです。また十二年も前から発足運動してきた「九州国立博物館設置期成会」（名誉会長亀井知事、会長瓦林潔氏）の実績もありました。ですから、この推進会議は、このような土壌の上に根づいたものといえます。しかし、私たち「地域懇」が昨年六月「地域に根ざした博物館」を作ろうという趣旨でフォーラムを実施し、その概要を本誌別冊「地域に根ざした博物館を考える」（昨年八月七日刊）を発行、つづいて同年八月の周年例会でも同テーマをとりあげて報告討議し、九月発行の『地域懇ニュース』No12にその概要を採録するなど、かなり意欲的に博物館建設問題に取組み、内外にアピールしたことも、右の推進会議発足構想化に有力な刺激と刺激を与えたこととも事実かと思えます。

ともあれ、私たち「地域懇」にとっては、博物館建設という目玉プロジェクトが、推進会議発足というより広範な主体者を包含する運動に転化し、「地域懇」が他の文化団体と提携して、その一員として建設運動に寄与することになるという客観的事実を容認することになったわけです。このことは、本年三月の常任幹事会で承認されたところであります。

ところで、推進会議発足の準備段階で、とくに昨年十二月から本年二月にかけて、当会議の構想、規約案、趣意書案等の作成にあたっては、主として代表幹事の奥田が「地域懇」を

代表して、他の文化団体の代表と共同で作業を進めてきました。また、こうした準備の諸会議の設営及び一般社会への報道に関しては西日本新聞社がとくに骨折ってくれました。とくに本年正月以降同紙は三回にわたって博物館建設のためのキャンペーン企画を行い、世論醸成に寄与したことは、ご承知のとおりであります。

さて、この推進会議に団体として参加したのは次の十七団体です。（順不同）

福岡県、福岡市、テレビ西日本、西日本新聞社、福岡県庁舎保存期成会、福岡地方史談話会、福岡文化連盟、博多町人文化連盟、装飾古墳を守る会、太宰府文化懇話会、歴史と自然を守る会、総合地域政策懇話会、西日本文化協会、福岡青年会議所、九州山口経済連合会、福岡考古懇話会、福岡ユネスコ協会

選択された規約の第三条と第四条は、この推進会議の目的と事業について、次のようにうたっています。

第三条 推進会議は西日本地域の文化向上のため、中核的役割を果たす博物館等を建設するために必要な研究、立案、啓蒙活動を行い、同一目的を有する各種団体、個人の結束をはかり、博物館運動の前進をはかることを目的とする。

第四条 推進会議は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (イ) 博物館等の種類、規模、運営等建設すべき博物館に関する基本方針の検討
- (ロ) 博物館等に関する内外資料の収集研究
- (ハ) 博物館等建設の場所に関する検討
- (ニ) 博物館等建設の必要性に関する意見の集約と世論の喚起
- (ホ) その他推進会議の目的達成に必要な事業

これをみてもわかるように、この推進会議は「地域に根ざした中核的博物館」というわたしたち「地域懇」の目論んだのとほとんど同趣旨に立つ博物館の実現に、本格的に取り組むいっそう大きな現実的運動体として誕生したわけです。

推進会議では、会長に瓦林潔、副会長に劔木亨弘、浜正雄、河北倫明、奥田八二、福田利光、顧問に鏡山猛、橋本武、鳥山隆三、谷口鉄雄、神田慶也、吉武泰水の諸氏が配置され、運営委員会委員にはさきの加入団体の代表及びその他の個人若干が任せられます。「地域懇」からは西嶋有厚氏を運営委員として選出しています。運営委員長は川辺良一氏です。

運営委員会は、推進会議運営の基本等を審議決定遂行の任に当る最重要会議で、二ヵ月に一度ぐらいの間隔で開かれるという構想です。もちろん総会がありますが、これは年一度開かれ推進会議の活動の根本を話合います。

推進会議のもう一つ重要な会議に、専門会議があります。専門委員がその構成メンバーとなりますが、これは運営委員会が選任します。その任務は規約第十四条に次のように規定してあります。

第十四条 専門会議は博物館等の建設と運営に関する技術的、学術的専門事項を研究、調査、立案し、成案を会長に答申し運営委員会の承認を経て推進会議の基本方針にま

で成熟させることを任務とする。

このように専門会議はこの推進会議の博物館立案機関で、毎月一回の頻度で開催される予定です。その委員には今のところ横山浩一、米津三郎、中村正夫、永竹威、平田寛、井上忠、青木正夫、沢村仁、都留大治郎、田辺員人、秀村選三、西嶋有厚、小野勇の諸氏が選出されており、岡崎敬氏がその議長です。いずれも、すぐれた学識経験者であることはご承知のとおりです。専門会議は必要に応じて分科会を設置します。

推進会議の経費、活動費には県の補助金、各有志団体の寄付金が予定されています。事務所は西日本新聞社内におき、宮田弘氏が事務局長の任にあたります。

第一回総会の時、挨拶に立った亀井知事は、はじめての知事選に立候補の時「国立九州博物館の誘致」の公約を行い、さきの期成会では名誉顧問となり、その運動による九州歴史資料館（太宰府、文化庁系、昭和四十七年）建設に寄与した経験もあって、「こんどこそは福岡に誘致すべきである。その機も熟した」旨語りました。その後も知事は四月下旬に、行政改革の一端として北九州財務局が福岡から姿を消すことを応諾した見返りとして国立九州博物館誘致の見とおしがかなり有望になった旨、新聞談話をのべています。県当局筋も、国立博物館は千葉県佐倉に政治的理由で先を越されたのだから、こんどは順序からして当然に九州だとの感触を強めています。

私たちも、これだけの経過と情勢の推移からすれば、国立博物館が九州に来るのが当然だと思ふようになりました。その意味で推進会議の発足は、まさに時宜をえたものとの感を深くします。が、それだけに、推進会議の川辺運営委員長もいわれるように、九州博物館の基本構想立案の作業を急ぎ、九州への誘致運動に一段と本腰を入れなければならない状況になってきたと考えるわけです。

第一回総会のあとをうけ、去る四月二十三日には推進会議の第一回運営委員会が招集されました。この時は右のような国内情勢の急転は必ずしも明らかではありませんでしたが、九州への誘致と可能性の雰囲気は十分汲みとられており、とりあえず推進会議の事業計画が審議され、シンポジウムの開催や機関誌発行、調査活動、研究会活動の構想が討議されましたが、中でも、早速の仕事として専門会議に付託する諮問事項を次のように決定いたしました。

(1) 地域に根ざした中核的博物館の基本構想について

- ① 博物館がなぜ必要か（この運動の意義）
- ② 地域に根ざすとは？（なぜ九州に博物館が必要なのか）
- ③ 中核的博物館とは？（地域の各種博物館・資料館等との間のネットワーク）
- ④ 望ましい博物館のあり方（その基本的性格）

(2) 当面する地域文化諸施設のあり方についての緊急提言

- ① 福岡市は埋蔵文化財センターの建設に着手するようだが、そのあり方について。
- ② また、現在の市歴史資料館の今後のあり方について。

③ さらに県庁跡地利用、本館・教育庁舎の保存と利用法などについて。

以上の三点に関し、市民団体としての要望なり提言はどうあるべきか。

右の二項目につき、現在推進会議の会長瓦林氏名義で同専門会議議長岡崎氏あて諮問が発せられており、六月いっぱいには、特に（1）に関する中間答申がえられるよう要望されております。六月中というほどに急ぐ理由は、さきの政府の文化政策の動向からして、来年度予算要求作業の土台を作らねばならぬのが第一、対市民 PR や対内意思統一のための共通理解を早く作った方がよいというのが第二です。もちろん求められているのは最終案ではないし、細目の構想ではありません。九州に実現さるべき中核的博物館の基本構想に政府、県当局、推進会議参加者、一般市民が客観的に知ることができる文章表現をえておく必要があるという趣旨のものです。

この諮問を受けて来る五月二十四日には、初の専門会議が開かれることとなります。基本構想そのものについては、すでに、抽象表現では、かなり論じられていると思いますので、中間答申案が出来るには、そんなに時間がかかるものではないと思われます。これができれば、当局者も、当推進会議に参加している各種文化団体も、一般市民も、待望されている九州博物館についての大まかなイメージができ、そのより具体的な内容について、熱のある甲論乙駁が生まれ、いわゆる百家争鳴の状況になり、世論が沸き、それが急速に一つの方向に統合され、望ましい九州博物館誕生のための在野の力になり、それによって政治を動かす一つのきっかけがえられるのではないかと期待されているわけです。

推進会議の運営委員会、専門会議には「地域懇」から奥田と西嶋が参加しますので、今後の経過についても適時本誌で報告していくことになりましょう。「地域懇」の例会またはフォーラムで、また、この問題をとりあげるのも必要かと考えております。

（おくだ はちじ 九大教授）

※「地域懇ニュース№20」1980年5月20日号より転載。

【資料】

博物館建設推進運動の現段階

奥田 八二

(一)

私ども地域懇は、発足後今日まで二年あまりのあいだ、主として月例会による懇話会活動を展開し、記録としての『地域懇ニュース』を月刊で発行してきましたが、ふりかえってみますと、ずいぶん文化や教育の問題を多く取扱っていることに気がつきます。なかでも「地域に根ざした博物館を」というテーマで、博物館づくりの運動を熱心に提唱しています。いま、それを列挙してみましよう。

1. 一九七九年六月十九日（フォーラム）
「地域に根ざした博物館を考える」
地域懇ニュース別冊No1 所収
2. 一九七九年七月八日（例会）
「福岡県における文化財保護について」
報告者 亀井明德氏（歴史資料館員）
地域懇ニュースNo11 所収
3. 一九七九年八月七日（一周年記念例会）
「地域に根ざした博物館を考える」
報告者 奥田八二氏（九大教授）
〃 西嶋有厚氏（福大教授）
地域懇ニュースNo12 所収
4. 一九八〇年四月七日（例会）
「地域の博物館づくりについて」
報告者 鳥山隆三氏（福大教授、北九州市自然博物館準備室長）
地域懇ニュースNo20 所収
5. 一九八〇年八月七日（例会）
「期待される博物館像」
報告者 西嶋有厚氏
〃 亀井明德氏
地域懇ニュースNo24 所収
6. 一九八〇年九月六日（例会）

「地域における美術館の役割」

報告者 古川智次氏 (福大助教授)

地域懇ニュースNo25 所収

7. 一九八〇年十一月七日 (例会)

「文化遺産としての建築物」

報告者 上田充義氏 (九大助教授)

地域懇ニュースNo27 所収

8. 一九八一年一月九日 (例会)

「地域に根ざした博物館構想」(その二)

—科学技術博物館について—

報告者 藤井 哲氏 (九大教授)

地域懇ニュースNo29 所収

以上、私どもの地域懇が月々の例会で取り上げた七件と、フォーラムで取りあげた一件の計八件について、『地域懇ニュース』にしたがって列挙しました。二九回の例会のうち七回は博物館関係のテーマを取りあげているわけで、地域懇が博物館に肩入れしすぎるとの非難があるかも知れないほどです。なお私自身、こわれて『地域懇ニュース』No18には「博物館建設推進運動のために」と、同じくNo20には「当面の博物館設立運動の経過について」の小文を掲載しております。

西日本地域又は九州という範囲で、中核的役割を帯びた博物館が、数多くの公的事業のうちで優先権をもって、建設される必要があることについては、異論をはさむ余地はないと思います。また、各県、各都市、及び主要地点でも、それぞれの規模と内容の博物館が、現に出来ているし、構想されてしかるべきだと思います。その理由づけは、一様でなくても一向に構わないわけですが、私は、日本の技術や生産が世界一流と自負するまでに発達しておりながら、博物館活動が世界的に二流、三流だとあっては情ないことだと思うのです。私の関心は、博物館活動の面からみた日本人の文化的劣位からの早期回復なのです。

(二)

私どもの地域懇が、このように「地域に根ざす博物館」建設の訴えをおこしたことが起縁の一つとなって、昨年四月はじめ福岡の地で「博物館等建設推進会議」という運動体が発足しました。十数個の地域文化団体がこの会議の構成メンバーとなり、私どもの地域懇もその一員に加わり、必要な役員をこの会議に配置し、運動の推進に協力してきたところです。

この「博物館等建設推進会議」がどのようにして、どのような目的、機構をもって結成されたか、何をしようとしているか等々については、さきにもふれたように、『地域懇ニュースNo20』(一九八〇年五月二〇日発行)で、運動の経過報告の形で、書いておいたところですから、ごらんいただきたいと思います。

ただここで二つのことを、指摘しておくことが必要かと思います。一つは、その後の動き

に関連してですが、この会議の専門会議に諮問されたのは次の諸事項です。

(1) 地域に根ざした中核的博物館の基本構想について

- ①博物館がなぜ必要か（この運動の意義）
- ②地域に根ざすとは？（なぜ九州に博物館が必要なのか）
- ③中核的博物館とは？（地域の各種博物館・資料館等との間のネットワーク）
- ④望ましい博物館のあり方（その基本的性格）

(2) 当面する地域文化諸施設のあり方についての緊急提言（福岡市埋蔵文化財センター、市歴史資料館、県庁舎・教育庁舎の後利用）

右の(2)については具体化されないままになっていますが、(1)については六月下旬の衆参両院選挙という政治的イベントのための中断はありましたが、その後、専門会議のメンバーが岡崎敬（九大教授）議長を中心に、討議をかさね、文章化し、それを議長がまとめるということで作業が進みました。ただ、その結果をどのような形で客観的に報告書として表現するかについては、政治的な配慮もあって、結論は保留されております。

『地域懇ニュース』№20で指摘すべきもう一つは、私ども地域懇からは、この推進会議の運営委員会、専門会議には奥田と西嶋が参加し、今後の経過についても適時本誌で報告すると約束したことです。この報告文も、ここで生じた義務の一端を果たそうとして書いておりますが、奥田、西嶋の二人は、それぞれ委員活動に参加し、とくに奥田は、さきの諮問に対する報告書の文章化に参画しました。

ところで、この推進会議の活動は、その後九月中旬の運営委員会の議にも^{マダ}ずき、年内創刊を目指して機関誌を編集発行することに集中されましたが、いろんな情勢からして私が編集長の役を背負うことになってしまいました。その後何回も何回も編集委員会を開いて、編集方針、創刊号の内容などを討議し、執筆者依頼、資料集め、レイアウト、印刷所交渉などをおこない、傍ら、機関誌の題名とそのデザインについても討議し、十月下旬に誌名とその表現を決定したわけです。それがいまごろになれる「文明のクロスロード」という副題づきの **Museum Kyushu** という機関誌です。十二月はじめにはほぼ原案どおりのものが形を見せ、校正の時間を経た上、十二月二十日頃に刷り上がりました。

これは季刊とするということで一九八一年一月に創刊号を、順次四月、七月、十月と刊行していくことが予定されております。

当面は運動の広がりだけを目的とし、その客観的物的武器をこの機関誌に求めようということで、発行部数や価格を配慮しての採算を無視し、経費は全額寄付等に依存する見とおしで、各地・各界に配布を進めております。またこの雑誌は目ざす博物館が出来た後も、刊行しつづける予定で、配布先や価格、採算は状況の変化によって決めようということです。

(三)

Museum Kyushu は、専門的であると同時に一般性を具備し、当面は博物館建設の必要性の宣伝をねらっております。私ども地域懇の皆さんもこの機関誌に強い関心を示され、必

要の助言を寄せられることを切望します。ともかく博物館建設に向けて全力投球しようというわけですが、知恵も技術も足りないことを承知してのことです。

こういうことをして、目ざす博物館が出来るのかという疑問が当然でできましよう。いうまでもなく、私どものやっていることは草の根の運動でしかありません。財政力を背景にもった政治が事を決着させるのです。それが、立地や規模や、施設の性格や運営に強く影響を与えることも認めないわけにはいきません。しかし、私どもの運動は、それらを方向づけ動かしていく因子の一つになろうというものでしょう。その因子としての役割が大きければ大きいほど私どもの満足度は大きく、私どもは自分たちをふくむ住民および将来の住民に奉仕できると確信しているのです。

この推進会議で活動している人々は、私をふくめて恐らく誰も、運動の効果について確言はできないでしょう。しかし、どのような見とおしをもってやっているかということは当然にあるわけだし、それを皆さんにお伝えし、かつ助言をいただく姿勢を示すべきであります。

まず、この運動は福岡にとどまらず、できれば全県、全九州等へと輪を広げていくべきでしょうが、今は、福岡に限定されています。そのことから当然に、福岡市、福岡県を通じて国政レベルの動向に影響を与えようということになります。その角度からいいますと、この運動は福岡市内外の文化関係者、財界、政界からは、かなりな同情を受けており、知事をはじめ県の文化・教育担当保管は直接間接に、物的にも精神的にも協力を惜しまないという姿勢であるとうけられます。

私どもの当面の目標は、「地域に根ざした中核的博物館」で。規模もかなり大きな権威あるものですから、日本では東京、京都、奈良の国立博物館及び大阪の国立民族学博物館、さらには千葉県佐倉市に建設中の国立歴史民俗博物館と同等の、国立博物館の誘致が念頭におかれています。そういう高級大規模なものが実現するかどうかですが、今福岡で運動として取り組むためには、県立クラスをこえて上のような国立博物館の実現を目ざすべきだというのが、この運動に参加している人たちの共通の願望です。そうなると、運動はかなり政治性を帯びてきますので、福岡を中心に世論を喚起する一方、福岡県知事をはじめ福岡の政治勢力及び県の事務当局に動いていただかなくてはなりません。この推進会議は、現にその方向で動いていますし。機関誌 *Museum Kyushu* もそうした趣旨をこめて編集され配布されています。

ただ *Museum Kyushu* の編集に際しては、これが福岡県下だけの博物館情報を扱っているとみられたら大変まずいので、あくまで西日本又は九州全域を視界にしていることを正視していただきたいのです。同様に推進会議の担い手も福岡に限られないように今後とも配慮されなければならないと考えております。

このような条件付きではありますが、さし当りには福岡の力が実際頼りになるわけです。五六年度国家予算の編成に際しても、県当局から文科省又は文化庁に、かなり強力で働きか

けていただきましたが、周知のように、現在の「財政再建」ムードのもとでは、私たちの願望の正当性、緊急性は国のレベルでもよく理解していただいているものの、予算をつけたら建設方針を確定するまでは、まだ現地の声の盛り上がりと財政上のゆとりと、決定に至る政治的「機」の熟成には、若干の距離があるかに聞いております。早くいえば、次の国立博物館は九州に作るべきだという点では、どこにも異存はない模様ですが、情勢が今一つ熟成に至っていないということのようです。

私ども推進会議としては、あと一押しという気持で、Museum Kyushu の編集、配布を一方で、他方では推進会議自体の運動の前進に力を注ぐ必要があると考えているところです。今年の六月頃までに、来年度国家予算の概算要求に向けて気の抜けない運動の展開が必要とされております。

以上、博物館等建設推進運動の現時点での状況を報告し、地域懇の皆様への御協力を切望する次第です。

(おくだ はちじ 九大教授 教養部・博物館等建設推進会議副会長)

※「地域懇ニュース№28」1981年1月20日号より転載。